

紀要

第 23 号

2010. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

【小特集】普及・活用・体験学習の「現場」から（1）

もう一つの現場「整理調査」からの情報発信

—整理作業室公開事業・整理調査成果報告会「あの遺跡は今！」の歩みと検証—

小竹森 直子

1. はじめに

発掘調査の成果を公開・発信する場・手段には、現地説明会・発掘調査報告書・展覧会といったものが一般的である。発掘調査実施中に行う現地説明会は、地元の人々に地域の歴史を知っていただくと同時に、埋蔵文化財や発掘調査についての理解を深めていただく上で大きな意味を持っている。また、各種メディアに取り上げられるのもこの時期が最も多い。整理調査を経て成果を取りまとめた発掘調査報告書は、内容・表現が学術的であることからも、調査・研究機関や研究者にはなじみ深いが、一般には難解である。そして、その一部は、これらの成果を活かして博物館等で展覧会が開催される。

しかし、全ての遺跡が新聞紙上等を賑わすわけではなく、発掘調査から報告書の刊行、展覧会の開催までには長期間を要する場合が大半である。また、発掘調査は、現地での発掘調査とその記録である図面・写真や出土品を整理・評価する整理調査によって成り立っているが、整理調査段階での情報発信は希有であると言っても良い。とは言え、整理調査により新たな発見があることも紛れもない事実である。

そこで、当協会では、もう一つの現場である「整理調査」からの情報発信として、滋賀県立安土城考古博物館内において整理調査事業を行っている調査整理課によって整理作業室公開事業・整理調査成果報告会「あの遺跡は今！」を、平成17年度から実施している。年2回の開催であることから、平成21年度末には丸5年・10回目の節目を迎えることになる。このことから、今後の事業展開に向けて、これまでの9回の取り組みについてのまとめと検証を行うものである。

2. 目的と事業内容

（1）背景と経緯

当事業を開始した平成17年度は、当協会が指定管理者として管理・運営している滋賀県立安土城考古博物館内で整理調査事業を行う調査整理課において、博物館内に所在する施設として回廊から整理作業の様子を見学することができる特徴をより活性化させるため、博物館の開館・休館日に併せた勤務シフト体制となった年度である。また、直接触れる遺物等の回廊展示の改良や作業内容の告知板の設置、窓際での作業実施等、発掘調査の実施を行っている当協会が指定管理者として博物館の運営を行うという強みをより活かそうとする動きがあった時期である。

一方、当協会が受託している国・県事業に伴う発掘調査の調査主体である滋賀県教育委員会からも、整理調査を活かした情報発信・活用事業の企画を打診されたことから考え出されたのが、整理作業室公開事業・整理調査成果報告会と発掘調査報告書刊行報告会であり、本文で取り上げるのは、博物館内にある整理作業室の活用を前提とした前者の取り組みである。整理作業室の公開については、かつて実施したことがあるが、整理調査成果の公開・報告に焦点をあてることから、新たな取り組みとなる。

さて、当事業は、調査期間中に行う現地説明会に準じるものであることから、調査事業に支障をきたす過大・過剰なものとなってはならない、と言うのが基本である。したがって、通常業務の範囲内で、整理調査中の出土品・作業を最大限に活用することが肝要でもある。

ところで、事業の名称については、いくつも候補が挙がったが、「近所で発掘していたけど、あれはどうなった？」あるいは「現地説明会はあったけど、その後はどうなったの？」と言う疑問や要望に応えるべく、「あの遺跡は今！」と決定した次第である。

（2）事業の目的

当事業の大きな目的は、現地調査終了後に実施している整理調査の成果やその作業工程を広く公開し、滋賀の歴史資産としての出土品の活用を図ることである。その中で、重点を置いたのは、成果を広く還元していくために分かりやすい形で情報を提供することであり、博物館内という立地を活かすことである。そのために、整理作業の様子を紹介しながら間近に出土品を体感しつつ、地域の歴史について興味・関心を深めることができる内容を目指している。

さらに、この事業を通して周知度の低い整理調査を含む発掘調査に対する理解の深化を図ると共に、当協会の周知も目指している。

（3）事業の内容（写真1～8、表1）

当事業は、整理作業室の公開に伴う遺物展示・作業体験・レプリカ等製作体験と整理調査成果報告会の2本を柱としている。

開催時期は、夏（8月・但し初回のみ11月）・冬（2月）の年2回とし、8月は「中間」報告会としている。初年度は、手探り状態でもあったが、当初からPart 1は出土品の解説や整理作業の公開、Part 2は成果報告会に重点を置くことで差別化を図ることとした。この初年度の結果を受

け、2年次以降は、さらに対象を絞り込み、年度1回目の中間報告会の開催を夏休み期間中の8月として児童・生徒や親子を対象として作業体験を充実させた作業室公開を主とした。また、年度2回目となる2月は愛好者やシルバー世代を対象とした成果報告会を主とし、これに適した企画・内容を目指している。

各企画・内容の実施にあたっては、実物がそこにあり、実物に触れて体感・体験できることが最大の特徴であり、これをより効果的に参加者に受け取ってもらうためには、「実物を目の前に直接話ができる」環境作りがポイントであると考えている。当初は、調査員・調査補助員のいずれにも、恥ずかしさがあり、なかなか声を掛けられなかつたり、オドオドする場面も多々見られたが、回を重ねるにつれ、いろいろな面で積極性が見られ、次節述べるように、このことが参加者の好感度を高めている大きな要因であることは特筆すべきである。

以下、主要内容について説明を加える。なお、各回の詳細は表1のとおりである。

整理作業室公開 整理作業室公開の最大の目的は、整理調査を知つてもらうことにある。したがって、実際に接合・復元・実測・製図などの作業を見学できなければ意味がない。そこで、調査補助員の約半数は通常の業務をそのまま行い、見学者に各作業の内容や道具についての説明を行う。

整理作業体験 キーワードの一つである「体感」を目的としたものであり、実物を使った拓本・マーキング・トレース等の作業体験である。拓本は初回から連続して行っており、対象遺物の種類を縄文土器・弥生土器・錢貨類等と変化させることにより、毎回楽しめるようにし、A4判のパウチ・シートにして「成果品」として持ち帰つて頂いている。この「お土産」=成果品は、栗津湖底遺跡出土の貝殻(出土品取扱基準G類区分済み分)⁽¹⁾を利用したマーキングと共に、記念品として、あるいは子供の宿題の成果品として、「お得感」や「満足感」に繋がっている。

3年次目のPart7からは、より実物に触れる能够のように土器分類を新たに加え、これまでに好評であった拓本を組み合わせた「土器を見極めよう！」としてリニューアルした。

遺物展示・特別展示 整理調査中の遺跡の出土品を、1.2m×1.8m程度の机上にオープン展示し、調査補助員を説明員・監視員として常駐させている。また、調査員が随時巡回し、説明や質問に答えるなど、遺物を前に直接話ができることが大きな特徴である。各回、8遺跡程度の展示を行っているが、整理調査が長期に渡つて遺跡の場合は、主となる遺物やテーマを変えて重複が無いようにしている。なお、調査補助員に対しては、前日に報告会の内容と共に、展示の説明を行つていている。このことは、単に見学者への対応のためだけではなく、二次的に研修の場として

も機能している。

解説資料については、初回Part1では、各遺跡1枚(A4判両面刷り)のシートとし、各展示机上に置いて自由に取つていただくようにしたが、存在に気づかれなかつたり、取り忘れ・重複があつたりしたため、Part2以降は冊子として受付で配布する方式に変更している。

開催に先行して記者発表した遺物がある場合や、直近に発表された現地調査中の最新成果があつた場合は、報告会の一つに加えると共に特別展示とした。これは、特に、現地説明会には行けなかつた、と言う県外や地元の人々、あるいは調査の作業員でした、と言つた人には好評である。

レプリカ等製作体験 Part1では、作業体験の一つとしてトレース・プラ板製アクセサリー作りを行つたが、出土品をモデルとしたレプリカや古代の技術を使った製作物の体験メニューは、Part4以降に定着したものである。特別展示した注目遺物などを題材とし、基本的に子供を対象としたものであるが、大人でも楽しめるものである。実物があるからこそ、そこで作り、知る効果が増幅されるよう、単に作れば良い、ではなく説明をし、実物を観察してもらうよう心掛けている。

製作体験については、300円～500円の実費負担としているが、アンケートの結果、実費負担・金額については肯定されている。

黥面土偶レプリカ・アクセサリー、縄文オリジナル・アクセサリーについては、その後、関連遺跡の報告会等でも行つており、この場がアイテム開発の場にもなつてゐる。

その他 Part1では、入江内湖遺跡出土の丸木舟の保存処理完了を目玉としたことから、尾上浜遺跡出土の丸木舟をモデルとした復元丸木舟と古代服を使った写真撮影会を博物館中庭にて行つた。初回でもあり、博物館から当事業への誘導手段としては効果的であったと評価される。

Part3では、整理作業室の他、収蔵庫・保存処理室・写場なども見学するパック・ヤードツアーリを実施した。参加者は児童・生徒と愛好者を含む大人が混在しており、大人向けの説明に対しては子供が難しく、時間も長かつた様であるが、普段は見ることができない場所・機器を見学し、体感したことは、参加者には一様に印象深かつたようである。

整理調査成果中間報告会 整理調査によって注目すべき遺物・成果が明らかになり、当事業に先行して記者発表したもの、あるいは直近に記者発表された現地調査の成果に絞つて、遺物を展示している整理作業室の一角を会場(30～40名席)とし、スライド等を用いて報告・解説を行つてゐる。

整理調査成果報告会 中間報告会とは異なり、博物館2階のセミナー・ルーム(定員140名)を会場としている。年度末に近い時期の開催でもあることから、Part1では整理調査中の全ての遺跡について午前から午後にかけて順次報

表1 「あの遺跡は今！」実施内容一覧

★：整理調査記者発表 ☆：発掘調査記者発表

展示	特別展示	作業体験	製作体験	その他	報告会
Part1 平成17年11月20日 延べ520名	11遺跡 ・入江内湖遺跡 ・烏丸崎遺跡 ・浮御堂遺跡 ・赤野井浜遺跡 ・関津遺跡 ・植城遺跡 ・高野城遺跡 ・竜法師城遺跡 ・大篠原西遺跡 ・靈仙寺遺跡		「君もなりきり調査員」 ・拓本 ・製図 ブラ版アクセサリー	・丸木舟写真撮影会★	3遺跡 ・入江内湖遺跡 ・関津遺跡 ・赤野井浜遺跡
Part2 平成18年2月26日 延べ200名	8遺跡 ・入江内湖遺跡 ・弘川佃・弘川宮ノ下遺跡 ・烏丸崎遺跡 ・浮御堂遺跡 ・赤野井浜遺跡 ・関津遺跡 ・植城遺跡 ・大篠原西遺跡 ・靈仙寺遺跡		・拓本		8遺跡+1件 ・入江内湖遺跡 ・弘川佃・弘川宮ノ下遺跡 ・烏丸崎遺跡 ・浮御堂遺跡 ・赤野井浜遺跡 ・関津遺跡 ・植城遺跡 ・大篠原西遺跡 ・靈仙寺遺跡 ・丸木舟の保存処理
Part3 平成18年8月20日 延べ252名	5遺跡+1件 ・津江湖底遺跡 ・入江内湖遺跡 ・赤野井浜遺跡 ・弘川佃・弘川宮ノ下遺跡 ・関津遺跡 ・木製品の保存処理	1遺跡 ・弘前遺跡★ 「構造船材転用の井戸枠」	・拓本		1遺跡+1件 ・弘前遺跡 「構造船材転用の井戸枠」
Part4 平成19年2月4日 延べ400名	6遺跡 ・入江内湖遺跡 ・弘川佃遺跡 ・烏丸崎遺跡 ・浮御堂遺跡 ・赤野井浜遺跡 ・関津遺跡	1遺跡 ・赤野井浜遺跡★ 「鰐面土偶と土偶形容器」	・拓本 ・マーキング	・鰐面土偶レプリカ・アクセサリー	3遺跡 ・赤野井浜遺跡 ・弘前遺跡 ・関津遺跡
Part5 平成19年8月19日 延べ247名	7遺跡 ・松原内湖遺跡 ・志那湖底遺跡 ・烏丸崎遺跡 ・西河原宮ノ内遺跡 ・野村北遺跡 ・安養寺辻野遺跡 ・堂山古墳群	1遺跡 ・関津遺跡★ 「角錐状石器」	・拓本 ・マーキング	・角錐状石器・有茎尖頭器 レプリカ・アクセサリー	1遺跡 ・関津遺跡 「後期旧石器時代の角錐状石器」
Part6 平成20年2月24日 延べ131名	8遺跡 ・西河原宮ノ内遺跡 ・関津遺跡 ・浮御堂遺跡 ・堂山古墳群 ・酒波寺遺跡 ・高野城遺跡 ・安養寺辻野遺跡 ・松原内湖遺跡	1遺跡 ・塙津港遺跡☆ 起請木簡実物大バネル レプリカ	・拓本 ・マーキング ・トレース（製図）	・「木簡を作ろう」 人形・荷札木簡などを 製作	3遺跡 「遺跡出土の文字資料」 ・西河原宮ノ内遺跡 ・関津遺跡 ・浮御堂遺跡
Part7 平成20年8月24日 延べ240名	7遺跡「道具」 ・六反田遺跡 ・野村遺跡 ・野村北遺跡 ・志那湖底遺跡 ・北蓋遺跡 ・夏見城遺跡 ・関津遺跡	1遺跡 ・塙乞手古墳★ 「鳥形木製埴輪」	・「土器を見極めよう」 土器分類 拓本 ・マーキング	・鳥形木製埴輪レプリカ	1遺跡 ・塙乞手古墳 「木のハニワ・土のハニワ」
Part8 平成21年2月22日 延べ380人	9遺跡 ・志那湖底遺跡 ・七条浦遺跡 ・針江瀬遺跡 ・極楽寺遺跡 ・小御門古墳群 ・肥田城遺跡 ・野村北遺跡 ・関津遺跡 ・夏見城遺跡	2遺跡 ・番場遺跡☆ 「古墳時代の網代」 ・塙津港遺跡 ・網代製品	・「土器を見極めよう」 土器分類 拓本 ・マーキング	・繩文オリジナル・アクセサリー	3遺跡 「ムラ・津・城」 ・野村遺跡・野村北遺跡 ・関津遺跡 ・夏見城遺跡
Part9 平成21年8月23日 延べ261名	4遺跡 ・番場遺跡 ・金貝遺跡 ・松原内湖遺跡 ・西万木遺跡	2遺跡 ・塙津港遺跡★ 「神社建物関連遺物」 ・佐和山城遺跡☆ 「桐文飾り金具」	・「土器を見極めよう」 土器分類 拓本 ・マーキング	・網代コースター作り ・マイお箸作り	2遺跡 ・塙津港遺跡 「神社建物関連遺物」 ・佐和山城遺跡 「桐文飾り金具」
Part10 平成22年2月21日	7遺跡 ・志那湖底遺跡 ・番場遺跡 ・塙津港遺跡 ・金貝遺跡 ・関津遺跡 ・上御殿遺跡 ・西万木遺跡	3遺跡 ・上御殿遺跡★ ・北蓋遺跡 ・柳遺跡		・「柿経（写経）に挑戦」 ・博物館一周クイズ・ラリー	3遺跡 「祈りと願いの考古学」 ・番場遺跡 ・金貝遺跡 ・上御殿遺跡



写真 1 整理作業室公開状況



写真 2 遺物展示・見学状況



写真 3 作業体験「土器を見極めよう」実施状況



写真 4 製作体験「鳥形木製埴輪レプリカ製作」実施状況



写真 5 製作体験グッズ 1

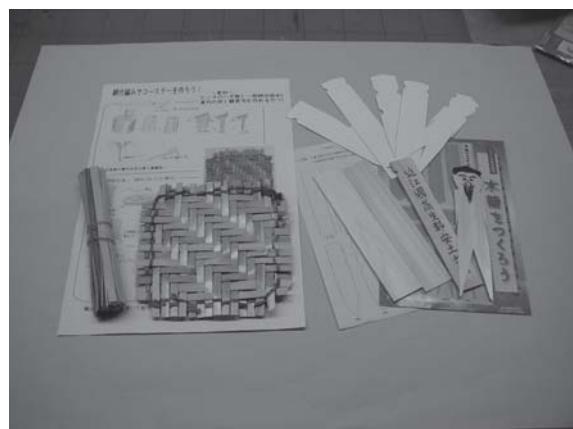


写真 6 製作体験グッズ 2



写真 7 整理調査成果中間報告会実施状況



写真 8 整理調査成果報告会実施状況

告したが、アンケート結果などを受け、次年度Part 4では注目の3遺跡に絞り込み、さらにPart 6・8以降はテーマ設定してじっくりと報告を聞くことができるよう改善し、他の報告会等との差別化を図っている。

3. 参加者の動向

当事業に対する参加者の動向を把握するための方法としては、参加者数の計測とアンケート調査の2つを実施している。

参加者数については、整理作業室入口に設けた受付で、子供（高校生以下）と大人に分けて作業室への入場者全体を数え、作業体験・製作体験等毎に参加者の計数を行った。

会場が別となる報告会については、別途計測し、これらを集計して延参加者数としている。アンケートは、作業室公開（作業体験・遺物展示）、製作体験・報告会毎に内容・設問を変えて実施している。また、アンケート項目・回答方法等についても、改訂を加えながら実施している。以下、これらの結果から見る参加者の動向の特徴と変化を見ることとする。

（1）参加者数の動向（グラフ1・3）

参加者数については、開催日の日時・天候、博物館への団体客の有無等の不確定要素が複数あることから、予測および定量化はできないが、今回、改めに見てみると予想外の結果になっていることが明らかになった。11月の観光シーズンで団体客が多かったPart 1と交通機関にも影響が出るほどの大雪となったPart 6を考慮しても、夏休み期間中の年度1回目の開催よりも、2月の年度2回目の方が総数としては多いのである。成果報告会の参加者数（80～100名）を差し引いても、その差は僅差にはなるものの、この傾向が逆転することはない。整理作業室で人の動きを見ている限りでは、夏休み期間中の方が、親子あるいは三世代家族の姿を目にする頻度が高く、全体としてもこちらの方が多い印象を受けていたが、結果としては錯覚だったわけである。

このことは、母数・調査方法が違うために直接比較はできないが、整理作業室公開に伴う参加者のほぼ半数が、「博物館に来てたまたま参加した」であるのに対して、報告会ではほぼ9割以上が目的を持って来た参加者であると言うアンケート結果からも傍証される。さらに言えば、2月開催の成果報告会の参加者層については、こちらが設定している愛好家層と合致している。

では、夏休み期間中の子供・親子を対象とすることに妥当性はあるのか。これを検証するために、参加者数における子供（高校生以下）の比率を見ると、年度1回目の8月の平均が24%、年度2回目の2月が12.9%となることから、狙いとしては外れていないと言える。県内の全小学生に配布されている「しが子ども体験学校」を（保護者が）

見て、製作体験を目的とした参加がある一方で、チラシを配布している地元安土町内からの参加はほとんど認められない現状もあり、教育現場への情報発信・浸透が大きな課題となっている。

（2）年齢層の動向（グラフ2）

参加者の年齢についての設問は、成果報告会ではPart 2以降、毎回行っているが、作業室公開ではPart 4以降となっている。したがって、事業開始当初の動向は掴めないが、概ね一定の傾向を示している。なお、参加者総数での子供（高校生以下）・大人と区分とは異なる世代設定であること、アンケート回答者が家族・グループ単位であり、子供が一人で参加して回答することがほとんど無いため、（1）での動向と連動するものではないことを明記しておく。

児童・生徒・学生、20～50歳代、60歳代以上の三区分で見ると、整理作業室公開では、20～50歳代が50%～60%程度、60歳代以上が20～40%程度である。もう少し詳しく見ると回答者本人の世代としては40～50歳代が40%～50%程度と最も高い比率を占めている。これは、児童・生徒を持つ保護者層もしくはやや上の世代である。参加形態を見ると夫婦、友達での参加が目に付くことから、壮年層世代も一つのターゲットとして捉えることが可能であろう。このことは、目的を持っての参加が9割以上を占め、60歳代以上が主体となる成果報告会においても、3割程度が40～50歳代であることからもうかがえる。

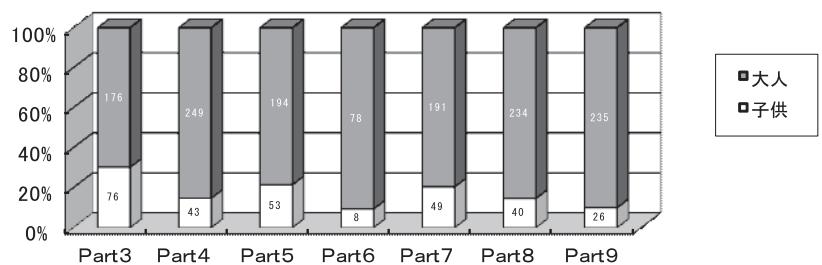
一方、大学生や20～30歳代については伸び悩みであり、児童・生徒世代と共に、この世代にとっての「魅力」とは何か、動機付けには何が必要なのか、その手段・方法には何が適しているのか、を追求することが課題となる。

（3）参加回数の動向（グラフ4）

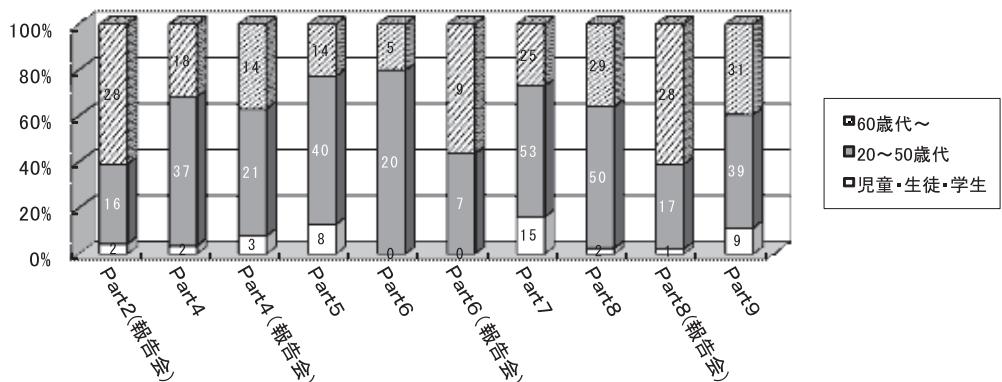
参加者の参加回数の把握、つまり事業の定着度、リピーターの形成度を把握するための設問は、2年次目のPart 3から実施している。回答数が、全体の参加者数の1/3以下のデータであるため、これをもって正しく状況を把握しているとは言い難いが、概ねの傾向は読むことができる。

Part 3からPart 6にかけて、つまり2年次から3年次にかけては、回を重ねる毎に初めての参加者率が10%程度ずつ減少し、2回以上の参加率がその分増加し、10%から30%～40%程度へ推移している。4年次目のPart 7・Part 8では、再びはじめての参加者率が15%程度増加し、5年次目のPart 9では再度減少傾向が見られる。これは、目的を持っての参加者率の増加と連動していると考えられ、メディアへの情報提供と連動させることで、新たに目的を持った新規参加者を獲得したと考えられる。ただし、これらの新規参加者の増加・拡大をリピーター母数の増加・拡大に連動させることができるか、否かが重要であって、数値

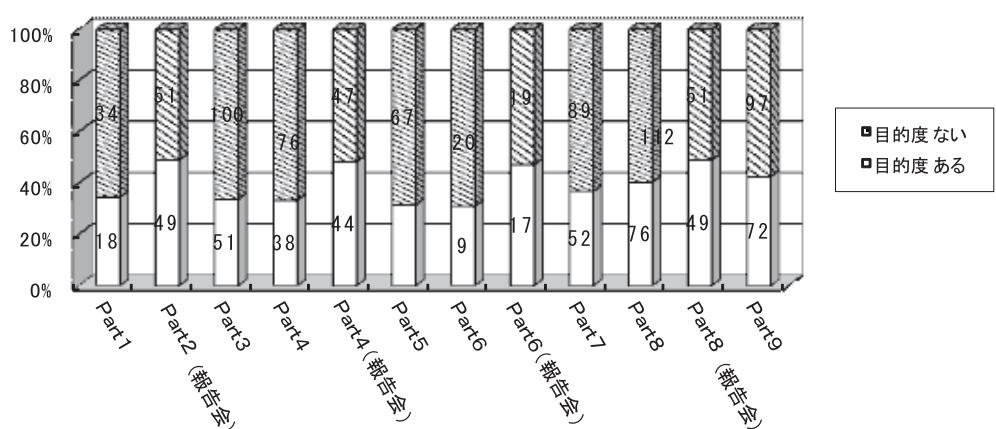
グラフ1 整理作業室公開における子供 / 大人参加率（データ数値：人）



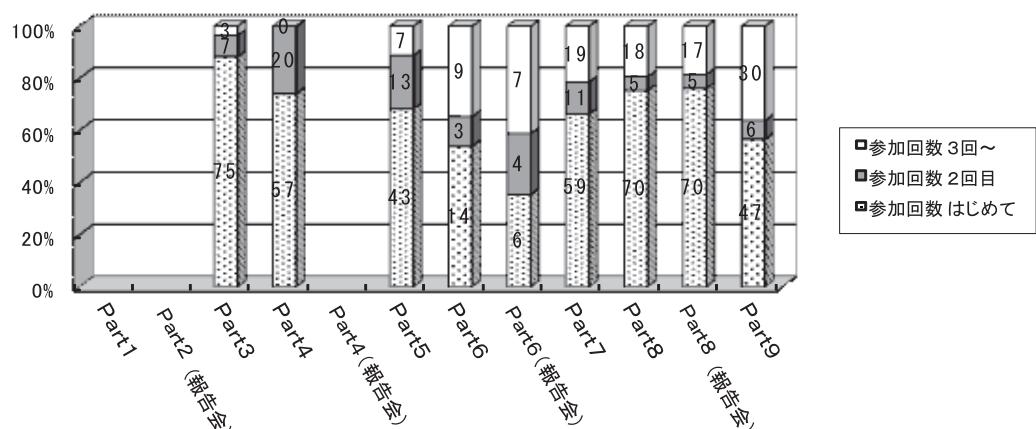
グラフ2 参加者世代比率（データ数値：人）



グラフ3 目的度比率（データ数値：人）



グラフ4 参加回数比率（データ数値：人）



の増減・多少に左右されるべきではないと考えられる。

4. 参加者の「声」を活かす

（1）参加者へのアンケート

アンケート調査では、参加者の意識を把握するための問を幾つか設けている。単に満足度・不満度を選択式として回答する形式の設問だけではなく、内容毎、あるいはこちらが把握したいこと（例えば説明の仕方、資料、展示の方法など）に対して良かった点・満足した点と悪かった点・改良すべき点を記述式で回答して頂く問も設けている。回答を記述式にすることには、回答者に記述を敬遠させ易い面があるが、こちらが設定した判断基準の指標に誘導されない、生の声がそこにあることが最大の長所であり、参加者の意識や要望を把握し、事業に反映する上で欠かすことができない声であり、有効な方法であると考える。以下、内容・企画を考える上でポイントとなった事例を幾つかあげる。

遺物展示 遺物展示について最も多くあげられた意見は、説明者がいて適宜、適切な説明があり質疑応答ができる点であり、親切・丁寧な対応に好感を持って頂いている。これは、全体を通して寄せられている声であり、「ありがとう」「楽しかった」と言って頂くたびに、調査員・調査補助員共によりやりがいを感じる。また、会話を通して、よりじっくりと見学する、と言う二次的効果も生じている。

展示方法については、当初は各遺跡の代表的な遺物を網羅的に展示していたが、「時代がわかりにくい」等の意見があり、時代順の配列とし、「文字資料」「道具」といったテーマに沿っての展示等、分かりやすい展示を目指している。これらの展示は、遺跡毎に担当者が展示品を選択して展示作業をし、解説資料を作成していることから、センスを問われる面もあるが、経験を積む場としての意味もある。

特別展示については、近年、発掘調査の最新成果を取り上げることが多く、「実物を前に、担当者から直接、話を聞けるのが良い」との意見もあり、発掘調査担当者に報告者・説明者として参加してもらうことにより、要望に応えている。

また、回廊から整理作業室に至る経路上にある収蔵庫に掲げている粟津湖底遺跡の貝塚の剥ぎ取りや針江浜遺跡の噴砂剥ぎ取りについての説明もして欲しいとの声があり、それ以後、常駐はできないが、極力、説明をするように心掛けている。

整理作業室公開・整理作業体験 見てもらう・体験してもらうだけではなく、その目的や意味合いを説明して理解していただくことが重要であると考えて応対の重点としており、この点に関する評価も高い。

整理作業体験としては、初回から連続して行っている実物を使った拓本が好評であるが、「もっと実物に触れたい」といった意見があり、遺物の分類と拓本を組み合わせた

「土器を見極めよう！」に変更した。土器分類は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦・埴輪などの破片を100点ほど机上に拡げ、「縄文土器を探してみよう！」と言ってこれを探し出してもらったり、探し出した縄文土器に付着している炭化物について「これは何だと思う？」と子供に問い合わせて考えもらったりしている。最初は、「触って良いんですか？」「本物ですか？」と、おずおずしている参加者が多いが、始めると子供も大人も結構はまるようである。

他にしてみたい作業として、土器の接合が上がっているが、今のところこの時期にこの作業にあった素材がなかったことから実現していない。

整理調査成果中間報告会・整理調査成果報告会 中間報告会は、作業室内で行っていることから会場の騒音やスクリーン画面の不鮮明さに対しての改善を望む声が多く、会場のコーナー配置等での配慮を考えていく必要がある。

成果報告会は、初回となったPart 2とそこで多くの声を受けてのPart 4での声の変化が、その後の在り方を決定付けている。Part 2では、1遺跡25分で網羅的に8遺跡の報告を行った。これに対して、「単なる事実報告はいらない」「一つの報告の時間が短い」「時代がよく分からない」「期待はずれ」と言った率直な意見を頂いた。これを受け、報告する遺跡を3遺跡に絞り込み、1遺跡40分としたのがPart 4である。3遺跡への絞り込みと時間の拡大は、「じっくり話が聞けて良かった」との声があり、午後に集中させたことも評価を得た。3本の報告の内2本については、単なる遺跡の評価だけではなく、より広い視野に立った遺跡の評価が盛り込まれていた点で「地域史的な評価が聞けて良かった」と言う評価を得た。このことは、成果報告会への参加者が、「単なる事例報告」ではなく「地域史的な評価」を求めていることを明確にした。

この参加者の成果報告会への期待・意識に応えるべく、続くPart 6では、整理調査中の遺跡の中から文字資料を共通素材とし、「遺跡出土の文字資料」と題して報告会を行い、共通テーマを設定できなかったPart 8でも報告する3遺跡を端的に表す言葉を用いて「ムラ・津・城」と題して報告会を行った。その結果、「共通する視点の話なので分かりやすい」「視点がはっきりしているので聞きやすい」との評価を得た。Part 8では、3遺跡共に地域史の視点を盛り込んだものであり、この点も良かった点として挙がっている。

解説資料・報告会資料においては、方法は異なるが遺跡の時代を分かりやすく把握できるよう工夫をしているが、報告会においては、Part 8で時代背景をまず概説する時間を設け、これに対しても「時代の概説があったので分かりやすかった」との意見があった。成果報告会への参加者は、愛好者や講座・講演会への所謂「常連さん」が高い比率を占めていることから、専門性の高い話しが聞きたいとの要

望があることは確かであるが、時代概説のような丁寧な説明も求めているようであり、これを行うことにより新規参加者や飛び入りの参加者にも聞き易さ・分かり易さを提供することができる。

アンケートに書かれた意見には、相反する意見もあり、全てに応えることは不可能に近いが、耳に痛い評価に対してこそ真摯に受け止め、次回に活かすことが、アンケートを実施する意味であり、その取り組みが目に見えるものであればこそ、「また次も行こう！」という期待感を持ったりピーターの形成に繋がるものと考える。また、敬遠されがちな記述式のアンケートに対しても、正直に向かい合っていただけるものと考える。

アンケートからの参加者の声は、事業・企画に何を求めるのか、と言った意識・期待・要望、換言すればどんなことは望まれていないのか、が込められている。したがって、これらを読みとることにより、私達（事業企画・実施者）が考えている、あるいは想定している参加者の意識・期待・要望との差を縮めることができる。この差が縮まる、あるいは新たな期待・要望の芽を拓げることで、さらなる事業展開の方向性も見極めることができると考えられる。

（2）調査補助員へのアンケート

この事業の実施にあたっては、調査補助員が果たす役割は極めて大きい。そこで、事業実施後には参加者のアンケートを供覧し、毎回ではないが、調査補助員の意識調査も兼ねて調査補助員にもアンケート調査を実施している。設問は、主として準備・実施方法などに対する意見、参加者の反応と調査補助員の感想などを求めるものとし、最近では自由記述としている。

初年度には、事前準備や事前説明の不備、さらに当日の役割分担や時間配分に対する問題点の指摘が多くあり、順次改良しているところであるが、毎回、何らかの指摘があるのは否めない。調査補助員の反応・感想としては、「自分たちの仕事を知ってもらえる・喜んでもらえた・楽しんでもらえた」ことに対してのやりがいや充実感が得られたことと同時に、ちゃんと説明できるように「もっと良く知りたい」という意欲も見られる。また、体験メニューの提案や広報・情報提供の拡充を指摘する意見も多く見られる。

正直なところ、ある意味、参加者の声よりも辛辣な意見もある。身内に対しての説明不足、毎年やっていることだし、という慣れや甘さもあることは事実である。たまたま、筆者は初回から連続してPart10を迎えるわけであるが、その中で職員の異動もあることから、目的・経緯・意識の継承を疎かにしてはならない、とこの一文を書きつつ反省しているところである。

5. 今後に向けて

手探りで始まったPart1から丸5年を経ようとする今、

「あの遺跡は今！」は、整理調査の現場だからこそできる活用事業の一つとして定着しつつある。また、この事業を通して一見華やかな現地調査だけではなく、一見地味な整理調査の存在やその意義についても知ることができる機会・場としても当初の目的の一端を果たしている。しかしながら、未だに解消できていない課題が存在することも確かである。この課題を提起することにより、次年度以降の事業展開の糧となることを期待してまとめにかえることとする。

まず、第一の課題は、博物館との連携である。「博物館内にある立地を活かす」とは、どういうことを意味するのか。博物館の来館者をそのまま当事業への参加者とすることができます、あるいはその逆、と言う側面が無いとは言わないが、そうではあるまい。8月・2月共に企画展の会期中であることから、見慣れた常設展示だけではないのだが、アンケートによれば、意外にも目的を持った参加者ほど、「博物館展示の見学をしない」との回答が多く見られる。一方、情報源としては、博物館からのダイレクトメールや直近の講座などでの告知・チラシの配布などが一定の効果をあげている。博物館の企画展やその他の屋外展示を絡めた取り組みなど、今一度、「博物館内にある立地を活かす」の意味を見つめ直す必要があろう。

第二の課題は、情報提供・広報の在り方である。現在実施している主な広報手段は、県広報、報道機関および地方紙、情報誌などへの資料提供、当協会ホームページ・ページ、「しが子ども体験学校」への情報掲載、関係機関および学校などへのチラシ・ポスターの配布、各種ダイレクトメールへの添付である。近年の傾向としては、現地調査や整理調査での新しい成果の記者発表による記事の掲載・放映と、その特別公開・報告の場としての告知が、新規参加者の参加動機に繋がっている。所謂「目玉」「注目すべき遺物」の有無が大きいのだが、毎回都合良くあるわけでもない。また、事業内容が豊富すぎるため、絞り込めない面もある。

第三の課題は、教育現場との連携である。次世代を担う子供達に実物に触れることができる場を提供することは、この事業の持つ大きな使命もある。にもかかわらず、伸び悩んでいる。なぜ、子供達が来ないのか。どうしたら、子供達が参加するのか。そのためには、保護者、特に母親口コミが大きいとの話を耳にしたことがある。とすれば、保護者層に情報を提供するには何をなすべきなのか。また、夏休みの宿題・課題とリンクさせるというのも一つの方法として考えられる。そのためには、学校のプログラムとの連携が必要であり、教師・教諭への情報提供にはどのような方法があるのか。これらは、当事業に限ったことではなく、多くの事業に当てはまる課題である。

最後に、整理調査現場からの情報発信としての「あの遺跡は今！」を振り返ってみると、特に目新しい取り組みをしているわけではない。参加者の抱く目新しさ・楽しさ・

満足感は、そこに実物があり、触れることができ、調査員等と直接話ができることがある。このことは、遺構（現地）・遺物を問わず文化財の活用にあっては広く共通する特質であろう。そして、次にこれを地域の中で、生活の中で保護し活用していくのは、文化財の本来的な保護・活用の主体者である地元住民・国民である。その一歩を踏み出す契機となることが、私達が行う活用事業の本来的な目的であると言えよう。

註

1. 平成11年4月1日付滋教委文保第524号滋賀県教育委員会教育長通知「滋賀県における出土品の取り扱い基準について」による。区分Gは、「科学的分析の終了した出土品のうち、保存を要しないもの」であり、当該貝殻は自然遺物としての計測・計量等を終了したものとして、これに準ずるものとしている。区分Gの資料については、廃棄可能とされているが、有効な活用を図るために当事業や博物館において利用しているものである。

(こたけもり なおこ：調査整理課 主任)